



幻の貨幣 ～戦時中に 作られた陶貨～ 後編



一銭陶貨（右2つ）と「色、模様、サイズが異なる陶貨」（左4つ）

前号では戦時中に作られた陶貨について詳しく解説しましたが、今号ではさらに、当館が収蔵している陶貨に関わる様々な資料について紹介していきたいと思えます。

まずは「色、模様、サイズが異なる陶貨」（右上写真）です。有田では一銭陶貨が作られましたが、写真左側の陶貨は現在確認されている一銭陶貨とは明らかに色やサイズが異なっており、さらに他地方で作られた五銭、十銭陶貨の模様とも違います。有田で陶貨を製造していた協和振興陶磁器株式会社の竹重米雄さんによると「いろんな材料で品質や色のテストをし、白や淡い黄色などの陶貨も試作したが、やはり貨幣らしい銅の色がよいということになった」(テレビ東京編『証言・私の昭和史〈5〉終戦前後』旺文社・1985より)とあり、これらはその試作品ではないかと思われまます。郷土史家である池田忠一さんから昭和54年に寄贈いただいたもので、現在のところ他には確認できていません。



左：造幣局有田出張所
右：造幣局管理工場

続きまして「造幣局有田出張所の看板」です。当時の陶貨製造工場があった篠原英雄さん宅に掲げられていたもので、この面を表にして掲げていたためか文字がかすれていますが、裏面には「造幣局管理工場」とも書かれています。有田に造幣局が置かれていたことを証明する大変貴重な資料です。

篠原さんのご息女恵美子さんより、平成22年に当館に寄贈いただきました。

さらに当館は、陶貨を製造していたという「プレス機」も収蔵しています。高さ約1.5mほどの重厚なもので、平成7年に江上昭蔵さんより寄贈いただきました。



プレス機

た。戦後、岩尾磁器株式会社（当時）の製造責任者である石井喜曾八さん（江上さんの兄）が譲り受けて、タイル製造に使用していたとのことで、かつては三台あったそうですが、一台のみ現存していたものです。おそらく前号で紹介した、空襲で有田に届かなかった造幣局の製造機の代わりに使用したプレス機ではないかと推測されます。

ところで、このようなプレス機は、元々は丸形のタイルや、やきもの製のボタンを作るために使用されていたものでした。こうした類似する形状の製品を作る技術や機械があったからこそ、造幣局から陶貨製造の受注を受けることができたのです。



やきもの製のボタン
※右端の1枚は陶貨

実は当館は、この「やきもの製のボタン」も収蔵しています。平成22年に竹重隆治さんより、大小様々な種類のボタンに加え、当時使用していた箱入りの状態のものも寄贈いただきました。その数約1万枚。これは戦時中、制服や国民服などに使用されていたもので、こちらも金属代用品として開発されました。

陶貨にまつわる4つの資料をご紹介しましたが、「試作品の陶貨」と「やきもの製のボタン」の2つは当館で常設展示しています。他の資料の閲覧を希望される方は、あらかじめお問い合わせください。

今年は、戦後80年ということもあり、当館にも戦争に関する問い合わせが多く寄せられています。過去の有田のやきもの業界が歩んだ戦争の痕跡をたどり、改めて平和について考えていきたいところです。

(永井)

皿 季刊 山

No.145

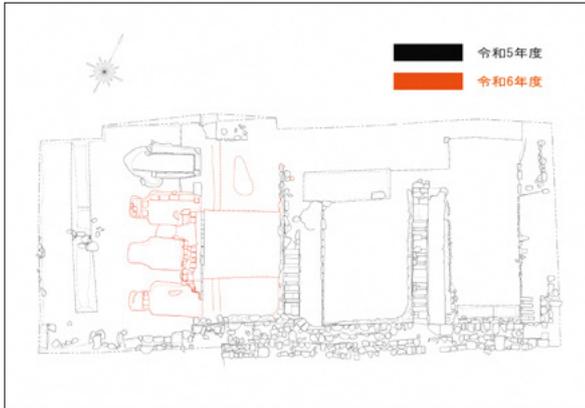
春 2025

有田町歴史民俗資料館・館報

小路庵発掘調査レポート その2



小路庵窯跡全体 俯瞰



窯跡全体図面

小路庵の庭の整備中に偶然発見された窯跡については、一昨年の9月から10月にかけて発掘調査を実施し、その状況については館報No.140でお知らせいたしました。その際に調査期間の関係で解明に至らなかったことがあり、昨年の4月末から5月末に、あらためて補足調査を実施しましたのでご報告いたします。

最初の調査では、3つの焼成室を持つ登り窯が発見され、最下部には胴木間（焚き口）が4つ並んで設けられていたことや、2室目の遺存状態が良好だったことから焼成室の構造なども判明しました。こうした窯構造や出土した陶片・窯道具類などから、明治期の窯であることが明らかになっています。しかし、その際に胴木間やその直上の1室目付近において改築ないしは修繕らしい痕跡が確認されており、今回はその付近を重点的に調査することにしました。

1室目については、残存していた最終砂床面の下を10cmほど掘り下げると、火熱で焼き締まった別の砂床面が顔をのぞかせました。そして、その砂床は焼成室の奥壁や側壁のさらに奥側へと続いていることが分かり、当初の壁面に大きめのハマや瓦を立てかけた状態で貼り付け、壁面を補強している状況が窺えました。おそらく、砂床をかさ上げし、火の巡りをよくしたものと推測されます。

次に、1室目の下部と胴木間の間に設けられた温座の巢付近についても、補修を繰り返した痕跡が見られました。火床境の位置の移動や火床幅の変更など、3つの段階に区分される面が観察され、少なくとも2回の改修があったことが分かります。

さらに胴木間については、当初は両サイドにレンガを積んだ細長い構造でしたが、改修に伴いレンガを取



1室目 俯瞰 左右部で旧床面を露出させた状態



1室目床と壁の境目 右側の旧床面は壁面の下へ続く

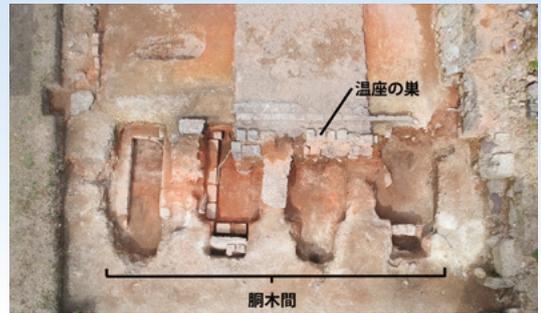
り払って胴木間の幅を広くし、奥行も短くしていることが判明しました。当初は胴木間が長すぎて、うまく温度管理ができなかったのかもしれませんが。

こうした遺構に関する新知見に加えて、補修用に窯体に埋め込まれた陶片などからも、新しい発見がありました。高台内に「副」字や二重方形枠内に「副」字銘を配した皿類などです。この銘はこれまで存在が知られていませんでしたが、小路庵の元の所有者である江副家の窯元銘の可能性が高く、江戸期より汎用された「福」銘を倣ったものと推測されます。

ところで、個々の町屋まで詳細に記される安政6年(1859)『松浦郡有田郷図』(佐賀県立図書館蔵)によると、当時小路庵の位置は屋敷地として使用されていた様子が描かれています。そのため、調査の締めくくりに当たり、窯体に影響を与えない程度に、窯体構築以前の様子についても探りました。その結果、窯体は盛土して築かれており、その下に厚さ約50cmに及ぶ白砂層が堆積していることが分かりました。この白砂は陶石の粉碎粒で、窯焼き(窯元)の工房跡などにおいて、陶石粒を水簸した際に水簸槽の底に沈殿する残渣を集めたもので、たとえばお祝い事がある際に道にまくなどの習慣があったといえます。そのため、敷地内では17世紀以降の陶片が表面採集されることから、やはり江戸期には窯焼きの屋敷があったものと推測されます。

この2回に及ぶ発掘調査の結果、発見された窯跡にまつわるストーリーが、比較的鮮明に浮かび上がってきました。江副孫右衛門の父八蔵は、明治初期にこの地に窯を築いて製陶業を営みましたが、石炭窯の導入に失敗して廃業したといえます。東京高等工業学校(現在の東京科学大学)に学んでいた孫右衛門は、卒業する明治42年(1909)に稼業を継ぐ予定でしたが、廃業によりやむなく日本陶器(現在のノリタケ株式会社)に入社し、後に日本碍子の社長や東洋陶器(現在のTOTO)の社長(5代目)・会長などを歴任しました。この孫右衛門の運命を左右した窯こそが、今回発見された窯跡というわけです。大正14年(1925)に孫右衛門は現在の小路庵を構えています。自らを運命付けた窯を完全に葬り去ることは忍びなかったのかもしれませんが、崩落を避けて窯の天井部は崩したものの、そのまま築山状に埋めて日本庭園として残しました。

有田では屋敷地内に登り窯を築くことは珍しく、もちろんこれまで発見例もありません。この窯跡は「小路庵窯跡」の名称で遺跡としての登録を済ませ、現在は見える遺跡として、また観光資源として活用すべく、着々と準備を進めているところです。劣化を避けるため一旦埋戻しを行いますので、見学をご希望の方はお早めに小路庵までお訪ねください。



温座の巢・胴木間
俯瞰



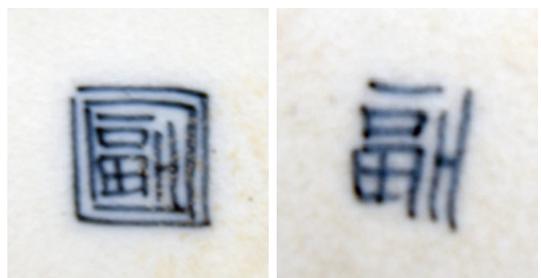
小路庵付近
安政6年(1859)『松浦郡有田郷図』(佐賀県立図書館蔵)



出土陶片(内面)
色絵素地



出土陶片(外面)
二重方形枠に「副」字銘



左右
「副」字銘
二重方形枠に「副」字銘



窯体構築以前の確認
(下部に白砂が堆積する)



第71回 文化財防火デー開催!

昭和24年（1949）1月26日に、修復中の奈良の法隆寺金堂から出火した火災によって、金堂内の壁画の大半が焼損してしまいました。世界的な文化遺産が被災したことで、この日を「文化財防火デー」と定め、全国的な防火運動が展開されています。

有田町においても、1月19日(日)に、幸平に所在する国指定文化財「旧田代家西洋館」において火災消火等の訓練を実施しました。今回は、事務室の漏電で出火したという想定でした。火災の発見者による初期消火および通報訓練、通報を受けた消防署員や地元消防団が現場に急行し、放水による消火訓練を行うとともに、昨年の防火デーで初めて試みた、水幕訓練も実施しました。水幕とは、延長ホースの数mごとに専用の連結部があり、そこから約13mの水柱が何本も上がり幕のようになるというもので、有田内山伝建地区のような建物が密集する場所で火災が発生した際に延焼を防ぐための装置です。一般見学者の中には、はじめて目にする圧巻の水幕に、思わず見入ってしまう方々もいらっしゃいました。その後は、見学者も参加して消防署員による消火器取り扱いの説明と水消火器による消火活動など、火災等の発生時に欠かせない訓練を実体験してもらいました。最後に、有田町文化財課職員による防火対象となった文化財の解説を行い、文化財防火デー消火訓練を終了しました。

災害が起こらないことが一番ですが、万が一発生した場合に備えて、冷静に対処できるようにシミュレーションできたことは、文化財を次の世代に伝えていく上で、貴重な機会となりました。



放水及び水幕訓練の様子



消火器取り扱い訓練



小学生の地域学習

例年12月～2月ごろは、地元小学校の3年生が地域学習にやってきます。ところが今年は見学だけではなく、先生方が新しい取り組みをなされており、当館もご協力させていただきましたので、その報告をしたいと思います。

まずは有田中部小学校の先生から、「皿かぶり」「皿踊り」そして「トンバイ塀」に関して、調べ学習をしている子どもの電話取材に協力してもらえないか、という相談があり、12月と2月に子ども達と電話でお話しをさせていただきました。かなり緊張していた子ども達でしたが、事前に聞きたいことを調べており、電話越しでもしっかりとメモを取って聞いている様子が伝わってきました。

次に、曲川小学校の先生から「むかしの暮らしの移り変わり」について授業をしたいので、町内の古い写真、例えば約50年前の有田駅と現在とを見比べるようなことはできるだろうか、とご相談いただきました。

当館には町民の皆様からご提供いただいた古写真や、町が所有していた古写真などを大量に保有しています。今回も先生と相談しながら、昔の曲川小学校や西地区の写真を提供し、授業で活用していただきました。さらに同様の依頼が有田中部小学校と大山小学校からも届き、それぞれの先生方と相談しながら、各地区の古い写真を選別して提供したところです。

また「むかしの道具」の調べ学習として、2月3日には曲川小学校3年生40人、2月13日には大山小学校32人が有田町歴史民俗資料館西館に見学に来ました。西館は、農耕具や衣食住にまつわる民俗資料が収蔵・展示されており、学芸員の指導の下、実際に触ることが可能です。そのため子ども達は「思っていたよりも重い」「こんな大変な作業だったのか」と驚きの声を挙げ、貴重な体験を楽しんでもらいました。

今年は見学だけでなく、電話取材や館蔵資料（古写真）の授業への提供という形で子ども達の学習に貢献することができ、大変うれしく思っています。他にもご協力できることがあるかと思っておりますので、町民の皆さんも、どうぞお気軽にご相談ください。

季刊『皿山』

通巻145号（令和7年3月15日）

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山一丁目4-1

☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185

URL : <https://www.town.arita.lg.jp/rekishu/>